渡辺さんの音声記録

本山西ふれあいのまちづくり協議会　前委員長
野寄財産区　前会長
渡辺利信さん

一　昔の野寄地域について

この地域は、兵庫県武庫郡本山村という名前でした。武庫郡は非常に範囲が広く、その中の本山村という村の名前で長い間ありましたが、昭和二五（一九五〇）年、神戸市に合併されました。合併するときにこの村がどういう方向に進むべきか、当時いろいろな意見が出ました。神戸市に合併するか、芦屋市に合併するか、あるいは、付近の本庄・本山・住吉・御影などで集まって一つの甲南市というものをつくったらどうか、という意見もありました。最終的に、神戸市に合併するか否かについて、村民投票を行いました。その投票の結果、僅差ではありましたが、神戸市に合併する票の方が多かったので、神戸市に合併することになり、現在に至っています。

一九五〇年に神戸市に合併された後は、東灘区本山町という名前でしばらく続いていました。この辺りは本山町「野寄」という地名でした。その後、本山町もさらに町名改名されることになり、「野寄」の地名について、当時、いろいろ議論されましたが、「野寄」の地名より「西岡本」という地名のほうがよかろう、という意見もあり、「西岡本」という地名になりました。昔の「野寄」はすべて、「西岡本」という地名になりました。「野寄」という名前を残したい、という思いから、この建物（本山西地域福祉センター）の二階は「野寄会館」という名前で残しています。このようなことを知らない人が増えていくのでは、と思いますが、やはり地名は残していきたいと思っています。また、この南の山手幹線沿いにお墓がありますが、そのお墓も「野寄墓地」という名称で地名を残しています。

明治の初め頃、住吉川周辺はほとんど畑や田んぼ、という様子でした。非常に人家の少ない、のんびりとした郊外地でした。流れの速い住吉川を利用して、山手のほうで水車産業を盛んに営んでいました。時期は江戸の初めのころから明治の終わりのころまでです。水車の動力を使っていろいろな水車産業をしていましたが、大正の終わり頃から、動力が電気やエンジンに代わり衰退してしまい、もう水車の名残はほとんどなくなってしまいました。本山村で二つ目の小学校として、昭和八（一九三三）年に本山第二小学校ができました。当時は近代的な洒落た建物でした。真っ白な校舎だったので、私はそれが特に印象に残っています。その翌年の昭和九年に私は小学一年生で第二小学校に入学しました。小学校では、楽しく過ごしていました。

二　水害の経験と復旧

昭和一三（一九三八）年に、この付近は住吉川が氾濫し、一週間ほど続きました。大変な雨量でした。山は雨水を受けてふくらんで柔らかくなって、土石流を起こしました。山は崩れてきて、崩れた山が川へ集中して堤防より高くなり、堤防を超えて土石流がザーッと一般の民家の方へおしよせてきました。そして、大きな石がごろごろ流れてきました。水の勢いというものはすさまじいものだと感じました。

いったん転びだすと、どんどん流れてきて、石が積み重なって、川の水があふれ出て、民家の方へと、西へも東へも、流れて、広がっていって、大変な流れになりました。本山第二小学校の南側へザーッと水が流れ込み、小学校のすぐ南側に通っていたJRの列車が立往生し、とまったままで線路はぐちゃぐちゃになりました。さんざんな有様でした。

野寄公園に有備無患「備えあれば憂いなし」と書かれた石碑があります。水害の後、国・県・市が水害復旧について、いろいろな手を尽くし、また個人は個人で自分の屋敷の土砂を取り除いて、元の生活に戻れるようにいろいろ努力しました。そういうことで、その時の記念に、石碑を建てました。その時の村長さんの言葉が碑文として残っています。死者は一一名でした。土石流の流れにおされて、全壊した家屋は七〇〇あまり、埋没、浸水した家屋は一五〇〇棟余りで、とんでもない災害が起こりました。ここには、天皇陛下からお見舞いをいただいて、大変感激した、ということが書かれています。私達が一番感銘を受けたのは、個々の力は小さいけれども、みんなが力を合わせれば、大きな災害から復旧することができたということです。

三　戦争・空襲・終戦・復興の様子

水害の前年、昭和一二年に、日本と中国との間に事変が起こってしまいました。事変というよりは戦争だと思いますが。初めは小さないさかいだったと思いますが、当時の日本の軍隊・国全体の考え方は、非常に強気な面がありました。だから、

あとに引けないという格好で争いがだんだん拡大し、たくさんの日本軍が進出しました。行けば必ず勝てる、という格好でおぞましい勢いで戦争が始まりました。ヨーロッパ諸国は日本が武力で中国を攻める事について快く思っていませんでした。日本がこのような戦争を起こしているうちに、第二次世界大戦へ発展し、アメリカやイギリスを相手に戦争をするようになりました。当時の国情は、軍国一色でした。天皇陛下を中心にし、日本の陸軍・海軍の権力も強く、政治家もその軍部の力を抑えきれず、戦争へ戦争へと、引っ張り出されたような時代でした。この辺りも、村の人たちは戦線が拡大すれば兵隊が必要になってくるので、兵役により徴兵されていきました。出征をするときには、にぎやかにラッパを鳴らしたり、太鼓をたたいたりして、駅まで出征する人を見送りに行きました。



渡辺さん　ご家族提供

　敗戦は、夢にも思いませんでした。昭和二〇(一九四五)年の八月当時、全国の主要都市は全部焼け野原になっていました。アメリカの爆撃機による攻撃で、木造家屋が多い日本の家屋は、計画的に絨毯爆撃として焼夷弾をばらまかれました。私も目の当たりにしましたが、焼夷弾は瓦を破って突き刺さり、中の油脂がもれ、なかなか火が消えない構造になっていました。日本の木造民家を攻撃するためによく研究した結果そういうものが有効だろうということで、焼夷弾攻撃というものが使われました。神戸の中心街は、三宮の市役所の建物と山手の方の海洋気象台は焼けていませんでした。それ以外は、JRの線が一本あるだけで、全部焼け野原で、本当に終戦当時の状態はすさまじいものでした。私から見れば、水害や地震よりも、戦争の被害の方が、すごかったと思います。日本の主要都市のほとんどが焼けてしまい、戦争に負け、連合軍による占領下におかれました。この時代は私たちにとっては灰色の時代でした。方向性を見失ったということが印象に残っています。戦災をうけて主要都市はほとんど焼け野原になってしまったので、そこに住んでいた人たちは疎開や親戚を頼るなど、生活を何とか維持しようとしていました。ところがその頼るべき家のない人はどうなったのでしょうか。公園の中に掘っ立て小屋を建てて、雨露をしのいだりする人たちもいました。

　戦地に出征した人たちは現地で武装解除されて、順次日本へ送り返されてきました。軍隊に行った人はほとんどが働き盛り、元気盛りの人たちが多いわけですから、そのような人たちが順次帰ってきて、そしてそのような人達の力で復興が進みだした、ということです。当時、戦災を受けたからと言って、仮設住宅をたててくれるようなことは全くありませんでした。家を再建したくても材木はなかなか手に入らず、よほど緊急の度合いから配給されていった、というような格好だったので、家を再建するにしてもなかなか難しかったのですが、少しずつではありますけれども、仮設の建設から始まって、なんとか雨露をしのぐような形で少しずつ家が建ちだしました。仮の、板葺きの建物が多かったですね。それからは普通の家を建てられるようになって、普通の木造の二階建ての家が建ちだしたのはもう一〇年ほどたってからだったと思います。

四　高度経済成長と復興事業

　高度成長期に入ったころから、少しずつ景気が良くなってきました。当時を考えると、昭和三〇(一九五五)～五〇(一九七五)年あたりが、非常に日本も元気になっていってるような姿だったと思います。だから、今日、神戸市内を眺めてみると、あれだけのビルが隣接していますが、焼け野原と重ね合わせてみると、人間の営みというものは素晴らしい力を持っていると思っています。五〇年も六〇年も過ぎていますが、みなさんが努力をした結果、現在の街並みがあり、あれだけビルが隣接するのだな、と改めて感心しています。

　戦争で失うものばかりで、大変でしたが、一つだけよかったと思うことがあります。それは戦災復興事業です。道路整備・区画整備・宅地整備を行い、まちづくりをするというような内容です。当時私も参加していましたが、五〇メートルの幅員の道路をつくったのです。こんなに広い道路いるのだろうか、と当時は思っていました。せいぜい二〇メートルくらいの道路が良いのではないかと思っていたのですが、今日になってみると、五〇メートルの道路でも狭いくらいで、ものすごい車社会になりました。当時、五〇メートルの幅員にすると考えた人は、かなり先見の明があったのかな、と思います。どこの生活道路も、以前は非常に狭くて　曲がりくねったような道も区画整備され、このあたり一帯も区画整備を行い、ある程度道が整備されました。これが戦争で失われるものばかりの中で少し良かったのかなと思うことです。このような機会を与えられたことが地域にとっ

て良かったと思っています。
　戦争の傷跡がなくなっていったのは昭和五〇年くらい、という感覚があります。しかし本当の意味での戦災からの復興には五〇年くらい時間がかかったと私は思っています。
　人間が生活するにおいて平穏で安全であるという時期が続けばよいのですが、思いがけない災害などは起こってしまいます。そのたびに神戸市の人が力を尽くして復興してきたということです。

五　阪神淡路大震災と震災復興

　平成七年の震災のことについて触れてみたいと思います。この地域で地震が起きて、一月一七日朝の五時四六分、まだ暗いうちに、思いがけなく大地震がおこりました。この地震は広範囲に及び、地盤の弱いところは被害もたくさんありました。大別して言うと阪急から上は古くなった家は、倒壊していましたが、比較的大丈夫でした。しかし阪急から南側は水害で土石流が流れた砂地の上に立った家という感じだったので地盤が弱く、ゆさぶられて倒壊する家が多かった。阪急から南側の被害がかなり大きかったのですが、国道二号線より南はもっとひどかったかもしれません。ものの見事に家がつぶれて、地震が起きて真っ暗な中で何が起きたかわからない。私の家は全くつぶれたわけではなかったので、何とかして暗闇の中をガラスの戸の裂け目から抜け出して、隣の家に声をかけました。真っ暗なかで家がつぶれて閉じ込められて、あちこちの家で声だけが飛び交っていました。特に女性の声は響き渡っていました。それでも、私は二回も大きな災害に遭っていますから、意外と落ち着いていました。
　手助けを必要としている人がいたので、下敷きになっている人たちを助けたり、一階がつぶれて、二階だけが残っていたり、あるいは二階が傾いて二階に住んでいる人が下りるに降りられないというような状態であったので、梯子を持って行って、おろす手伝いをしたり、ずいぶんあの時は訳も分からず走り回っていたと思います。それから、建具がゆがんで出られない人たちもいました。
　私は区役所の方へ薄暗いうちに行きましたが、区役所には誰も人がおらず、消防署の前にずらっと人の列ができていました。「なんの列ですか」と聞くと、「救助をお願いしに来ています」と。それだけ救助を求めている人が多いということでした。消防署の職員もごくわずかしかいませんでした。これはとうてい間に合わないと思いました。灘区の方を見ると煙が上がっていて、火事が起こっていました。灘区の方までも地震の被害が及んだのだと、その程度のことしかわかりませんでした。テレビもラジオも何もなく何の情報も入らないので、近隣で助け合うしかなかったのです。その辺りも一つの教訓になったと思います。その時その時の生活をどうするか、雨露をしのぐ場所をどうするか、ということで、避難場所として指定されていた本山第二小学校に行った時、当日の朝早くから一〇〇人くらいの人が集まっていました。しかし、小学校の校舎に亀裂がはいって、危険だから使えない、という状態でした。あとから建てた新校舎だけは、何人かの方が収容されていました。当時は、建物の損壊を免れた人の家に身を寄せたり、親戚に疎開したり、小学校・中学校の子供たちは、親戚を頼って転校したりしていました。それから、行政も、本格的に動き出しました。当時の救済の方法は、広い公園などにたくさんの仮設を建てるものでした。しかし、なかなか全員に行き渡るというわけにはいかないので、少し郊外地の方にも、仮設を建てる、ということもありました。仮設はありがたいと思いました。水害や戦争で空襲を受けた時は、仮設をたててやろうということはありませんでした。だからよけいにありがたいと感じました。
　それから復興への第一段階として、瓦礫の処理が始まりました。跡地に家を再建するにあたって、瓦礫の処理をしていなかったら、手の付けようがないからです。比較すると、水害の時は屋敷の中に入ってきた土石流は、全部自分たちで道へ放り出さなければならなかったのですが、地震で壊れた時は、公で全部見てくれました。神戸市の瓦礫の処理についてはかなり迅速にやってくれたと私は思います。トラックに瓦礫を積んで、処理場まで行くのに大変な渋滞を続けながら、瓦礫処理者が進んでいきました。瓦礫の処理の申し出をするのに、三宮まで行かなければなりませんでした。なんとかして三宮まで行き、そして、申し込みの順番を待って、瓦礫の処理についての申し込みをしました。私は一〇件くらいの家の処理をまとめて申請することにして、四月ごろにいったのですが、「処理ができるのが七月頃になります」と言われ、瓦礫の処理の見通しについてはなかなか難しい状態でした。でも、比較的速やかにやっていただいたと思っています。
　その時すごく感じたことは、戦争からの立ち直りの時は、国は主体性を失っており、家は全部焼かれてしまい、働き者はまだ戦地から帰ってこないという非常に疲弊した状態からの復興でした。だから、戦災復興の時と比べると、今回の震災復興は、全然国力が違い、また機械力などにも雲泥の差があるので、あれだけのいろいろな機械を動員でき、かなり遠いところからも応援に来てくれ

たと思います。だから、復興への第一歩、という様な格好になったと思います。

戦災時の復興状況と比較すると、比較にならないくらい早いスピードで復興したと思います。今日ではほとんど影を観ないような状態まで復興したと思います。特に東灘区が、元の住民の数よりも多くなったのが一番早かったと思います。地震直後にある街をあるいたときには、屋根が全部地べたに落ちて波打って、目線より下に屋根があるという様な街並みをずっと歩いていました。すさまじい事態が起きたわけで、そのことを思いながら今街並みを見ると、大変良かったなと思っています。いろいろな災害が起きたときも、再建に向けて努力をすると、口では簡単に言えますが、当時見通しがすぐに立てられるものでもないし、みんな、それぞれが苦労・苦心していたと思います。まだまだ借金を残している方もいらっしゃるかもしれません。それでも日々の生活の救いとなったのは、周辺の都市からの救援でした。救援物資を乗せた自動車が、山手幹線をずらーっとならんでいました。この辺りは、京都・長岡京市の自動車がたくさんきてくれました。それから、その時一番困ったことは水です。水がなければ、本当に恐怖です。一番早く給水タンクを見かけたのは、本山第二小学校で東京都のタンク車が早々と水を積んできてくれた時でした。水をすこしずつ分けてもらって、配水してもらいました。この建物は地震では被害はありませんでした。夕方ごろになってここに来た時、ここの人たちがお湯を沸かしてお茶を入れてくれました。そこで初めて暖かいお茶をいただいてほっとしたような記憶があります。

六　防災福祉コミュニティ設立

この地域では地震が起きた後に連帯意識が生まれました。神戸市は、市民の安全を推進するための条例というものを平成一〇年に作りました。その条例を根拠にして、地域で自らを災害から守るための組織をつくる、「防災福祉コミュニティ」という名前です。小学校単位に防災福祉コミュニティを作りました。このコミュニティの組織では、毎年防災訓練を行っています。平成一二年度ごろに、震災の時に閉じ込められた人を救出するためのバールやショベル・毛布が必要だったという様な意見があったので、このような資機材を資機材庫に保管し、災害が起きたときに使えるようにしようと考えました。資機材庫は、三つの公園の中に配置しました。その三つの公園は、甲南大学のすぐ東側にある岡本の長子公園、田中町は本山南中学のすぐ東側に、それから野寄公園です。この野寄公園の一角に、防災の資機材庫を作って、その中に資機材を充実させています。そして毎年小学校の子どもたちにほかの防災施設と合わせて説明することにしています。

七　新住民との関わり

最後に、新しい住民との交流についてお話したいと思います。地震のあと新しくできたマンションは耐震設計や防犯的な設備も整っているので、安心して住めるという理由からそのマンションに来られた人が多いです。だから、防災活動や防犯活動に参加する人が非常に少ないです。本当は高層マンションに住んでいる人たちは、災害が起きて断水になったり電気が途絶えたりしたら困ってしまいます。実際に、震災の最中に、一〇階に住んでいる方が、「一〇階まで水を運ぶのに年寄りばかりで困りますので、なんとか手を貸してくださる人はいらっしゃいませんか」ということもありました。そのような時にボランティアの方々が手伝ったりしてくれたりもしました。

地域住民がいろいろな形で協力しあい、助け合い、人間の生活圏が維持されてきました。古い古い昔から、このようなことが連綿として続いて、いろいろな組織がいい方向へ目指そうということで、今日まで活動が続いています。

二〇一三年　一〇月三一日

編集　丸山哲



野寄公園「有備無患」の碑の前で説明する渡辺さん